

談話標識と言語使用域について

廣瀬 浩三

0. はじめに

廣瀬 (2017) において、シノニム記述の観点からいかに談話標識 (Discourse Markers) を記述していくかを論じたが、ある特定の機能を表すいくつかの談話標識の使い分けを明確にするためにキーとなるのは、それぞれの談話標識の本質的な特徴とともに、言語使用域 (register) に関する相違である。

本稿では、まず、言語使用域という概念が言語学の中でどのように定義づけられてきたのかを簡単に振り返り、言語使用域が重視されるコーパス言語学の具体例として Biber, et al. (1999) における言語使用域の取り扱いをまとめておきたい。

談話標識の使い分けの具体的な議論としては、廣瀬 (2017) で取り上げた「付加」を表す一連の談話標識について、その言語使用域を踏まえて、主として話し言葉やくだけた書き言葉で用いられる談話標識と、学術的な論文等、堅苦しい書き言葉で用いられる談話標識を区別して、記述していきたい。

1. 言語使用域 (register) とは

言語使用域 (register) という用語が、言語学で使用されるようになったのは、Reid (1956) によるとされており、以下のように述べられている。

He will on different occasions speak (or write) differently according to what may roughly be described as different social situations: he will use a number of different registers. [Reid 1956: 32] (話者は様々な場面で異なる社会的状況として概ね記述される事柄に応じて様々な話し方をすることになる。すなわち数多くの異なる言語使用域を使用することになる。)

この言語使用域という用語は、Firth 学派と呼ばれるイギリスの言語学者たちによって重要視されてきたもので、その後、M.A.K. Halliday や R. Quirk などのロンドン学派に受け継がれていき、N. Chomsky の生成文法が理論言語学の主流となっていく中で、別途、独自に機能主義文法や実際の言語使用を重視する記述文法、さらには、社会言語学を構築していくことになる。

この言語使用域という概念をさらに詳しく論じて、その重要性を定着させたのは、Halliday, McIntosh & Strevens (1964) であった。その著書名にもあるように、関心があったのは理論言語学的な枠組みの構築ではなく、いかに言語学の成果を応用して言語教育を行っていくかという点にあり、広く記述的な機能主義の立場に立っており、言語にどのような異種 (variety) が存在するかに注目し、地理的な方言とともに、言語使用 (use) によ

って生じる異種の大切さを取り上げたのである。常に使用する異種を方言 (dialect) とし、実際の言語使用の場で生じる異種を言語使用域 (register) として区別し、その言語使用の状況に応じて選択される異種に関心が寄せられたのである。

以下、Halliday, McIntosh & Strevens (1964) に従って、少し具体的な言語使用域についての下位区分を見ていこう。

言語は、機能と状況タイプ (type of situation) によって変化すると捉えられ、その場面との関わりをさらに、談話のフィールド (field of discourse), 談話のモード (mode of discourse), 談話のスタイル (style of discourse) の観点から、言語使用域を下位区分している。

談話のフィールドとは、当該の発話状況で何が進行しているのか、すなわち言語活動が行われている領域のことを言っている。ここでは、言語活動の性格、例えば、論文、議論、学術的なゼミナールの状況タイプにおいて、さらにその中で取り上げられているその主題 (topic) によって、さらなる下位分類がされる。専門的な分野や非専門的な分野等、様々な下位分類が考えられる。言語活動が生じているその場面そのものによってある特定の異種が決定され、その言語活動においてどのようなことが話題になっているかによって、さらに詳細な異種が決定されると考えるのである。

談話のモードは、言語活動の媒体あるいは様式のことを指しており、その主要な区別は、話し言葉 (spoken language) と書き言葉 (written language) である。そして、そのさらなる下位区分としては、新聞、広告、会話、スポーツの実況などを認めることができる。文学における言語もその一つに加えることができるが、そのさらなる下位区分として、散文的な小説、軽妙な詩等、多くのジャンル (genre) が考えられる。ジャーナリズムの異種としては、さらに、報告、論説、特集記事などに細分化されることになる。

最後の言語使用域の分類として、参加者の対人関係に関わる談話のスタイルがある。このスタイルを特徴づけるラベルについては、様々なものがあるが、くだけたスタイルに対しては、colloquial, casual, informal, intimate などの語があてられ、堅苦しいスタイル、あるいは丁寧な相手に敬意を表すスタイルのラベルとして、formal, differential, polite が考えられ、一つの発話場面でそのスタイルが変化することもあり、スタイルが連続的なもの (cline) として存在している。

上記の言語使用域の概念を自らの言語理論に取り込んだのが M.A.K. Halliday であり、本稿で関心のある談話標識を体系的に扱った Halliday & Hassan (1976) において、上記に述べた3つの概念を以下のようにまとめ直している。

The FIELD is the total event, in which text is functioning, together with the purposive activity of the speaker or writer; it thus includes the subject-matter as element in it. The MODE is the function of the text in the event, including therefore both the channel taken by the language—spoken or written, extempore or prepared—and its genre, or rhetorical mode, as narrative, didactic, persuasive, ‘phatic communion’ and so on. The TENOR refers to the type of role interaction, the set of relevant social relations, permanent or temporary,

among participants involved. [Halliday & Hassan 1976:22] (談話のフィールドとは、話し手や書き手の意図的な活動とともに、テキストが機能している出来事の総体である。したがって、その一つの要素として主題が含まれる。談話のモードとは、出来事の中でテキストの機能である。したがって、そこに言語が伝達される経路(話し言葉か、書き言葉か、即席のものか、準備したものか)と、テキストのジャンルないし修辞の様式(物語的、教訓的、説明的、「言語交際的」など)の両方が含まれる。役割関係とは、役割の相互作用のタイプ、つまり、談話の当事者間の、永続的、あるいは一時的な社会関係の集合体を指す。)

さらに以下のように続けて、言語学的特徴の記述は言語使用域の記述になることを述べている。

The linguistic features which are typically associated with a configuration of situational features—with particular values of the field, mode and tenor—constitute a REGISTER. [Halliday & Hassan 1976:22] (談話の場面的な特徴を構成するもの、特に、談話のフィールド、モード、役割関係の特定の価値と顕著に結びついている言語学的特徴が言語使用域を構成する。)

こうした言語使用域の概念は、N. Chomsky などの理論言語学では、理想の話者を前提とするので、問題とされず、主として、社会言語学や語法研究などで取りざたされてきたが、コンピューターを利用したコーパス言語学(Corpus linguistics)の登場によって、その重要性が再認識され、さらに緻密に議論されていくことになる。次節で、その代表的なものとして Biber et al. (1999) について言及しておきたい。

2. コーパスにおける言語使用域—Biber, et al. (1999) を中心に

コーパス言語学のアプローチは、構築したコーパスに基づき、言語現象を記述することを目指しているが、Biber et al. (1999) では、コーパスの定義そのものに言語使用域が組み込まれている。

A collection of spoken and written texts, organized by register and coded for other discourse considerations, comprises a corpus.[Biber, et al. 1999:4] (話し言葉と書き言葉の総体は、言語使用域により構成されて他の談話的事柄により記号化され、コーパスを構成する。)

さらに詳しく述べると、Biber, et al. (1999) では、言語使用域を「異なる状況や目的と関連している異種」とし、方言は「話し手の属する集団と関連している異種」として区別している。

Although native speakers are less consciously aware of register distinctions, it turns out that grammatical differences across registers are extensive than those across dialects. When speakers switch between registers, they are doing different things with language, using language for different purposes, and producing language under different circumstances. Many language choices—especially between grammatical variants—are functionally motivated, related to these different purposes and production circumstances. As a result. They are often extensive linguistic differences among registers.[Biber, et al. 1999:21] (ネイティブスピーカーはあまり意識的に言語使用域の区別を認識していないが、言語使用域の間の文法的な違いは方言間の文法の違いよりも広範囲であることが分かる。話し手が言語使用域を切り替えるとき、言語を用いて異なることをしたり、異なる目的のために言語を使用したり、異なる状況下で言語を生み出している。これらの異なる目的や生産状況に関連して、多くの言語の選択（特に文法的な変異形）は機能的に動機付けられている。結果として、それらはしばしば言語使用域間で幅広い言語的相違を示している。)

次に、Biber et al. (1999) において使用されている Longman Spoken and Written English Corpus (以下、LSWE Corpus と言う。) における言語使用域の分類を見ておきたい。大きくはコア言語使用域 (Core registers) と補足的言語使用域 (Supplementary registers) を区分して、以下のようにまとめている。

Table 1 Overall composition of the LSWE Corpus

	Number of texts	Number of words
Core registers		
Conversation(BrE)	3,436	3,929,500
Fiction(AmE & BrE)	139	4,980,000
News(BrE)	20,395	5,432,800
Academic prose(BrE)	408	5,331,800
AmE for dialect comparison		
Conversation(AmE)	329	2,480,800
News(AmE)	11,602	5,246,500
Supplementary registers		
Non-conversational speech (BrE)	751	5,719,500
General prose (AmE & BrE)	184	6,904,800
Total Corpus	37,244	40,025,700

さらに、コア言語使用域については、以下のような特徴づけを行っている。

Table 2 Summary of the major situational differences

	CONV	FICT	NEWS	ACAD
mode	spoken	written (+written dialogue)	written	written
interactiveness and online production	yes	(restricted to fictional dialogue)	no	no
shared immediate situation	yes	no	no	no
main communicative purpose/content	personal communication	pleasure reading	information/ evaluation	information/ argumentation/ explanation
audience	individual	wide-public	wide-public	specialist
dialect domain	local	global	regional/national	global

以下、本稿で論じた言語使用域の重要性を踏まえつつ、その応用研究として廣瀬 (2017) で扱った「付加」を表す一連の談話標識について、さらに詳しくその使い分けについて考察していきたい。ただし、本稿では、上記の Biber et al. (1999) を利用して、コーパスに基づく記述を目指すのではなく、筆者が収集した事例も加え、様々な観点から記述的にそれぞれの談話標識を特徴づけたい。

3. 「付加」を表す談話標識の使い分けについて

英語において、話し言葉や書き言葉で、自らの意見を述べていく場合に、すべて一度にまとまりのある発話や論述を行うのではなく、聞き手、あるいは読み手を意識しつつ、順序立てて、先行発話や論述に付加していく形で、主張や事実の記述が行われていく。以下、言語使用域を踏まえ、主として話し言葉やくだけた書き言葉で用いられる談話標識と主として堅い書き言葉で使用される付加を表す談話標識に分けて、それぞれの談話標識の特徴づけを行いたい。

3.1 主として話し言葉やくだけた書き言葉で用いられる談話標識—and, also, besides, plus

まず、表記の談話標識の全体像を見ておくと、「付加」を表す談話標識の中では、and が最も一般的で、話し言葉と書き言葉の両方で幅広く用いられる。次に also の頻度が高く、話し言葉の 2 倍の頻度で書き言葉において用いられる。besides と plus は、主に話し言葉やくだけた書き言葉で用いられる。近年、特に日常的なアメリカ英語において、plus の使用が増えてきている。

位置については、and を文頭で用いるのは避けるべきであるとする規範的な文法書や語法書も多いが、話し言葉と書き言葉の両方で幅広く用いられている。also は、文中に現れることが最も多く、文頭でもしばしば用いられるが、文尾に現れることはまれである。besides は、通例、文頭で用いられ、文中で用いられることもある。文尾にくることも可能

であるが、その頻度は低い。plus は、and と同様に、通例、文頭のみ現れる。

and は、さまざまな意味関係の発話や文を結びつけるのに用いられる。also は、しばしば and と置き換え可能であるが、話し言葉や比較的くだけた書き言葉で、文頭に現れ、助言やその他、相手に指示を与える際に、しばしば用いられ、命令文の文頭にくることも多い。besides は、直前の発話を支持するための付加的な理由や決定的な主張を導入する際に用いられ、通例、単に同種のを列挙する場合には用いられない。plus は、並列的な追加を表す場合と、前言を強め、話し手の主観的な結論めいた意見を付加する場合の両方に用いられる。以下、辞書等でこれまであまり触れてこられなかった個別的な留意点を例文を挙げながらまとめていきたい。

まず、文頭の and についてみておきたい。次の両者を比較すると、前者は、「昼食を作った」と「ケーキを作った」という2つの行為を行ったことが単に述べられているのに対して、後者は、and 以下のことが付加的に述べられており、昼食を作った上にどれほどのことをしたのかが強調される。

(1) a. I cooked lunch *and* made a cake.

b. I cooked lunch. *And* I made a cake. —以上、OALD⁹

also では、文頭では、通例、新しいポイントやトピックを加えるのに用いられるが [Carter & McCarthy 2006:40]、前後の発話の主語が同じ場合は、also の位置は、文中の方がより一般的となる [Larsen-Freeman & Celce-Murcia² 1999:533]。主語が同じ場合に文頭にくると、追加することに聞き手の注意を喚起し、文中では、後続する内容により重点が置かれる。

(2) a. He threshed the wheat. *Also*, he hoed the corn. (彼は麦を脱穀した。また、トウモロコシを掘り起した。)

b. He threshed the wheat. He *also* hoed the corn. —以上、Larsen-Freeman & Celce-Murcia²

なお、文尾の also は、通例二つの句を結びつけるのに用いられるが、以下の例では、イタリックの句を結びつけている。²

(3) Pollution can cause *trees and bushes and other things* like that to die. And then animals that were in them, like *birds and squirrels and things*, can die *also*. —Carter & McCarthy (汚染は木々や茂みやそういった類のものを枯らしてしまう可能性がある。そしてその後、その中にいる鳥やリスなどの動物も死に至しめることになりかねない。)

besides は、通例、すでに述べたことや書いたことに対して、別の観点からより重点を置く主張を導入するのに用いられる。

- (4) If your tooth really hurts you, you should make an appointment with the dentist. *Besides*, it's high time you had a check up.—Parrott (もしあなたの歯が痛めば歯医者予約をした方がよい。しかも、検査をしてもよい頃だ。)

次のように、同種のことを単に並列的に追加する場合に用いるのは通例不可となる。

- (4) She likes football. **Besides*, she likes tennis and basketball.—*OALD*⁹
I speak French fluently. **Besides*, I speak some Italian.—*CALD*⁴

besides が話し言葉やくだけた書き言葉で用いられる場合には、直前の発話を補強するのに用いられるが、より堅い英語で用いられる場合には、直前の発話を越えて、付加的な論点を導入する際に用いられる。(4)では、文頭の *and* と共起していることにも注意されたい。

- (5) Those items—a gun case and ammo pouch—were found in his home. But the defense said none of it was proof of murder. And *besides*, they had another suspect in mind.—Larsen-Freeman & Celce-Murcia³ (銃のケースや弾薬が入った袋などの品が彼の家で見つかった。しかし弁護団はいずれも殺人の証拠にはならないと言った。というのも、彼らには別の容疑者が念頭にあったからだ。)

besides は、文尾で用いられることもある。¹

- (6) You interrupted me, and you're late *besides*!—*NTC's AELD* (あなたは私の邪魔をした。その上、遅刻！)

「いずれにしても、どっちみち」の意で、結論となるような事実や論点を付加する場合には、*besides* は、*in any case* と交換可能である。

- (7) What are you trying to get a job as a secretary for? You'd never manage to work eight hours a day. *Besides / In any case*, you can't type.—Swan³ (何故あなたは秘書の仕事に就こうとしているのですか？1日に8時間はとても働けないでしょう。いずれにしても、タイプも出来ないし。)

以下の例でも、*besides* の代わりに *in any case* を用いることが可能である。

- (8) “Is it possible that the key you're holding unlocks the hiding place of the Holy Grail?” Langdon's laugh sounded forced, even to him. “I really can't imagine. *Besides*, the Grail is believed to be hidden in the United Kingdom somewhere, not France.”—D. Brown, *The Da*

Vinci Code (「あなたが持っている鍵が、聖杯の隠し場所の鍵だということはないかしら?」
ラングドンは自分でも不自然に聞こえる笑い方をした。「とてもそうは思えないよ。い
ずれにしても、聖杯はフランスではなくイギリスのどこかに隠されていると信じられて
いるんだ。」)

次の例では、*besides* は、*I mean* と交換可能とされる。

- (9) I don't like her going out alone at night. You don't know what sort of people she's going to meet. And *besides/I mean*, she's far too young.—Swan⁴ (彼女に夜一人で出かけてほしくない。どんな人に出会うかわからないだろ。しかも、だって彼女は年齢が若すぎるじゃないか。)

次に、*plus* についての留意点を見ていこう。*plus* は日常的なアメリカ英語の話し言葉で用いられることが多いが、ややくだけた書き言葉でも次第に用いられるようになってきている。

- (10) Rollie wanted to store time than a fifteen-minute fuse could provide. *Plus*, he considered himself an expert and wanted to experiment with new devices. —J. Grisham, *The Chamber* (ローリーは 15 分間持つ導火線以上の時間がほしかった。しかも自分が専門家だと思いつき、新しい装置で実験を従っていた。)

ただし、*plus* は依然として接続詞的な性質をとどめ、文頭での副詞的用法は発達させているが、*plus* を文中、文尾で副詞的に用いるのは不自然となる。

- (11) a. ?They, *plus*, had to drive through the mud.
b. ?They had to drive through the mud, *plus*. —以上、Celce-Murcia & Larsen-Freeman²

次の例では、同義的な *besides* と *plus* を使い分けていることに注意されたい。*plus* を介して、感情的な陳述を導入している。

- (12) “There wasn't anything to tell. Besides, I was embarrassed,” she said. “I didn't want J.D. to know I didn't trust him, especially when it turned out he's innocent. I felt like a fool. *Plus*, the whole thing's illegal, so why incriminate myself?”—S. Grafton, “*K*” *Is For Killer* (「何も言うことはなかったわ。それに、どぎまぎしていたしね。」と彼女は言った。「J.D. には私が彼を信頼していないことは知られなくなかったのよ、特に彼が無罪だと分かった時にはね。自分が馬鹿である気がしたわ。そもそも、すべてが法律違反でしょ。何でわざわざ自分を有罪にしくっちゃいけないのよ。」)

as well の用法にも若干触れておこう。as well は、書き言葉より話し言葉において何倍も頻度が高く、話し言葉では、also より2倍以上の頻度で用いられている。as well は、文尾に添えられるのが普通で、通例、文頭や文中では用いられない。

(13) a. I just ignored it. *As well I think everybody else did.

b. *Could I as well have a fried beef in black bean sauce. —以上、Carter & McCarthy

最後に、口語的な成句表現にも言及しておこう。「(好ましくない状況)に加えて、さらに悪いことには」の意で、先述の内容に新たな情報や確認する情報を付加する。通例先行部分で好ましくない状況が述べられ、on top of that 以下でさらに良くない状況が述べられる。通例コンマを伴い文頭で用いられる。くだけた言い方となる。

(14) The demands of work can cause gaps in regular attendance. *On top of that*, many students are offered no extra lessons during the vacation.—COB(G) (働く必要があって定期的に出席できない可能性がある。さらに、休暇中は多くの学生が補習を受けることが出来ない。)

to cap it all / to top [topping] it all (off) も通例、前述した内容よりもさらに悪いことを付加する際に用いられる。

(15) a. I was lost, hungry, and *to cap it all*, it started to rain.—LED (私は道に迷い、お腹も減り、さらに悪いことに、雨が降り出した。)

b. *Topping it all off*, they found themselves locked out of their own house.—CDAE (あげくの果てに、彼らはふと気づくと自分の家から閉め出されていた。)

前例では、ピクニックに行っても、道に迷い、お腹がすいてきて、さらに雨が降ってくるという散々な目に遭ったことになる。後者の例では、先行発話はないが、結果として不幸が重なったことが示唆される。³ これらの表現は、いずれもくだけた言い方となり、以下のような堅い文脈で用いるのは不適切となる [Parrott, 2010:363]。

(16) The outbreak of war was due to three main factors. Firstly there was a long history of trivial tension which the removal of strong, central power unleashed. The, there was deep dissatisfaction among military personnel, many of whom had not been paid for over a year. ?*To top it all*, the sacking of the entire cabinet was more than anyone could bear.—Parrott

3.2 主として堅い書き言葉で使用される付加を表す談話標識—moreover, further(more), in addition

ここでも、まず談話標識の使い分けについての全体的な外観を述べておきたい。

いずれの談話標識も and, also, besides, plus と比べ、より堅い言い方となり、主に書き言葉で用いられる。特に moreover は非常に堅い言い方となる。また、いずれの談話標識も、通例、コンマを伴って文頭で用いられるが、moreover は、文頭以外に比較的自由に文中や文尾に現れる。furthermore も文頭及び文中、さらに付随語として文尾で用いられるが、聞き手へ新しい実に対する注意喚起を促すという表現効果から、できるだけ前に置いた方がよいとされる。in addition も文中で用いることが可能。ただし、further と in addition は、通例、文尾では用いられない。

furthermore は、特にある議論の 3 番目、あるいは 4 番目の論点を導入する際に用いられることが多い。moreover は、ある主張の 2 番目のポイントを導入する場合にしばしば用いられる。in addition は、主張を追加するというよりは、2つの状況や概念を結びつけるのに用いられることが多い。

以下、前節と同様に、例を上げながら、それぞれの談話標識の特徴をもう少し具体的に記述していきたい。まず、moreover は、堅い言い方となり、日常的な事柄を語る場合に用いると不自然になる。

(17) ?My father said, “Let’s go to the beach on Saturday. *Moreover*, let’s rent a boat.” —Celce-Murcia & Larsen-Freeman²

moreover は位置的に比較的自由に、次のような位置も可能となる。

- (18) a. I wanted *moreover* to speak to him before he left.
b. I wanted to speak to him *moreover* before he left.
c. I wanted to speak to him before he left *moreover*.
d. I *moreover* wanted to speak to him before he left. —以上, Parrott

次は、be 動詞の後に moreover が用いられている例である。

(19) It was a good car, and it was, *moreover*, a fair price they were asking for it. —CIDE (それはいい車だし、さらに彼らの言い値も公正な価格だった。)

ただし、次のように句の内部に生じるのは、通例、不自然となる。

- (20) a. ?I was the most, *moreover*, experienced adventurer in the group.
b. ?I was the most experienced, *moreover*, adventurer in the group. —以上, Schourup

moreover が、しばしば 2 番目の論点を導入するのに用いられるのに対して、furthermore は、特に、3 番目あるいは 4 番目の論点を導入する際に好まれる [Larsen-Freeman & Celce-

Murcia³ 2016:539]。 ⁴

- (21) a. Students, applying to law schools, need to know whether the schools have the resources to help them choose the right job. *Moreover*, prospective students need data about schools' career counseling services. (ロースクールに応募する学生はそのロースクールに適切な仕事を選ぶ助けとなるリソースがあるか知る必要がある。さらに、有望な学生はキャリア・カウンセリングのサービスについてのデータが必要である。)
- b. We find that students who work part time performed better in the pre-test of managerial finance. We also find that student ownership of a checking account positively affected performance. *Furthermore*, we find that student participation improved student learning. (パートタイムで働く学生の方が経営財政学の予備テストでより良い成績を取ったことが分かった。また当座預金口座の所有が好ましい影響を与えたことも分かっている。さらに、学生の参加が学習を改善することも明らかとなっている。)

前後の発話の主語について、主語が同一の場合は *also* が好まれ、*in addition* は、別の観点からの追加陳述を導き、特に主語が異なる場合に好まれる [Celce-Murcia & Larsen-Freeman² 1999:533]。

- (22) He threshed the wheat. *In addition*, his children hoed the corn.—Celce-Murcia & Larsen-Freeman² (彼は小麦を脱穀した。さらに子ども達は、とうもろこしをくわで掘り起こした。)

さらに、次のように、*in addition* を文中で用いることが可能で、後続内容に焦点があてられることになる。

- (23) There is, *in addition*, one further point to make.—*OALD*⁹ (加えて、もう一点言うべきことがある。)

in addition では、文脈により、何と何を結びつけているのか明確でない場合もあるが、*in addition to*+ 名詞句では、前文の内容を要約する名詞句により、何に対して追加情報が加えられているのかが、より明確になる [Larsen-Freeman & Celce-Murcia² 1999:558]。

- (24) Calcium, found in daily products, orange juice, and other foods, is needed for bone strength. *In addition to* good nutrition, weight-bearing exercise is important.—Larsen-Freeman & Celce-Murcia² (カルシウムは、日用品やオレンジジュース、その他の食品に含まれ、骨の強化に必要とされる。良い栄養素に加えて、体重を増す運動が重要である。)

なお、「in addition to + 名詞句」の表現は、besides の冗漫な言い方であるとの見解もあるが、表現にバラエティを持たせたり、リズムの良さを狙って用いられることがある。しかし、堅い言い方の文脈で用いられた場合には、よりくだけた言い方となる besides と置き換えると不自然となる。

最後に、what is more[what's more]に少し言及しておきたい。「おまけに、さらに加えて」の意で、先述の内容を強調したり、支持する内容を付加するのに用いられる。what is more が、やや形式ばった書き言葉で好まれるのに対して、be 動詞の縮約形を含む what's more は、くだけた言い方となる。書き言葉では、書き言葉に会話的な雰囲気を与えたい場合にも用いられる [Parott 2010:348]。通例コンマを伴って文頭、あるいは文中で用いられ、通例、文尾には来ない [Ball 1986:81]。

- (25) a. Some African myths emphasize the need for individuals to help the community. *What is more*, even the animals are expected to help out.—Fodesen & Eyring (アフリカの神話は個人がコミュニティーの手助けとなる必要性を強調している。その上、動物たちもその助けとなることが期待されている。)
- b. You are wrong, and *what's more* you know it. —*OALD*⁹ (君は間違っている。しかもそのことは分かっているくせに。)
- c. It's raining quite hard. *What's more*, I have no umbrella.—*Eastwood* (雨が激しく降っている。おまけに、私は傘を持っていない。)

以上、主として書き言葉中心に用いられる「付加」を表す談話標識の留意点を上げたが、紙幅の都合上、すべて網羅的に記述していないことを断っておきたい。今後、日本人学習者を念頭に置いて、きめ細かい使い分けを探っていく必要がある。また、複数の談話標識の共起制限に関する記述についても大きな課題として残っている。⁵

4. おわりに

本稿では、談話標識の使い分けを考察していく上で、言語使用域 (register) を踏まえることが重要であるとの認識から出発し、言語使用域の考え方を整理することから議論を始めた。その基本的な概念として、Field, Mode, Style(Tenor) の3つが挙げられるが、とりわけ、英語学習者にとっては、後の2つの観点からの談話標識の使い分けを知ることが必要である。Field については、Corpus 資料の利用が生産的であるが、Corpus 資料に基づく研究では、頻度など量的な分析は客観的に示すことができるが、質的な分析をどこまで進めていけるかが、それぞれの研究者に委ねられることになる。

後半部では、「付加」を表す談話標識を具体例として取り上げ、辞書などでは、囲み記事で簡単に記述がとどまっている使い分けについて、注意すべき点を取り上げたが、紙幅の関係もあり、まだ項目羅列的な記述にとどまっている。特に、これまであまり問題にされてこなかった位置的な相違にも言及したが、この位置的な相違では、個々の談話標識内で

の使い分けと他の談話標識との相違の両方が議論されるべきであろう。

談話標識の使い分けを論じる際には、まずそれぞれの談話標識の本質的な相違を記述する必要があり、そのような本質的な相違が言語使用域とどう絡んでいくのかを明らかにしていかなければならない。松尾・廣瀬・西川(2015)において、43の基本的な談話標識の記述を行ったが、本格的な談話標識の使い分けの研究は、まだ始まったばかりと言っても過言ではなく、筆者としても、談話標識の機能的カテゴリに沿って、それぞれのグループに属する談話標識の使い分けを探っていきたい。そうすることによって、談話標識が合図する話者の発話意図が明確になっていき、談話標識を通して、ネイティブスピーカーの心の裏を解きほぐしていけるのである。談話標識の研究はまだまだその先が広がっている。

注

- 1 besides が後置され、副詞としてコンマを伴わず文尾で用いられ、「その他に」の意で、先述したことや物、人以外に付加するものを示す。通例、a lot [lots, much, plenty] more, others など「さらに多く、他に」の意を表す語句が前に用いられる [松尾・廣瀬・西川 2015:29] : discounts on televisions, stereos, and much more besides—OALD⁹ テレビとステレオ、並びにもっと多くの製品の割引 / I'm capable of doing the work and a lot more besides.—OTE² 私はその仕事がこなせるし、もっとそれ以上のことも出来る。
- 2 文尾では、too が好まれる。他方、この too も追加・付加を表す談話標識として文頭に來ることがあり、ジャーナリズムのアメリカ英語に多い [Quirk et al.² 1985:637] : She's had her novel published this year; but too, she's written some interesting articles on acupuncture (彼女は今年小説を出版しているが、さらに鍼(はり)療法についてもいくつかの興味深い記事を書いている。) この例では、接続詞の but が先行していることにも注意されたい。
- 3 次のような類似表現もある [松尾・廣瀬・西川 2015:32] : Gabrielle had been a tremendous asset to his campaign since he'd promoted her to his personal campaign assistant three months ago. And to top it all off, she was working for free.—Brown, Deception 3ヶ月前彼が(大統領)選挙活動のアシスタントに起用して以来、ガブリエルは貴重な人材だった。おまけに、彼女は報酬なしで働いていた / JANE : You're beautiful and fun and charming. Your life is perfect.... TESS : Perfect? Are you crazy? You have no idea. You want to know the real reason why I decided to stay in New York? I got fired from my job. And to top it off, Rudolfo dumped me. He dumped me.—Dresses [映] (ジェーン:きれいで、明るくて、魅力的。完璧な人生ね。… テス:完璧? あなた、おかしいんじゃない? 分かってないわね。私がニューヨークに住もうと決めた本当の理由を知りたいでしょ? クビになったのよ。そればかりか、ルドルフォに捨てられた。あいつは私を捨てたのよ。)
- 4 ここで述べたのは、あくまでも傾向であり、以下のように furthermore を単に2つ目の論点の付加に用いても問題はない: I suggest we use Barkers as our main suppliers—they're good and furthermore they're cheap.—OALD⁹ (納入業者としてベーカーズ社を利用することをお勧めします。良い品を納めますし、さらに価格も安いです。)

5 副詞として用いられる談話標識は、一般的に、特に話し言葉で、しばしば and と共起するが [Carter & McCarthy 2006:40], 他の副詞的な談話標識とは共起制限がある。次のように、well との共起が可能であるが、however とは共起しない: *Well, besides, it's my turn.*/**Besides, however, it's my turn.* 同様に、moreover は、after all とは共起しない: **After all, moreover, it's my turn.* [以上、Schourup 2001:1040]

参考文献

- Aijmer, K. 2013. *Understanding Pragmatic Markers: A Variational Pragmatic Approach*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Ball, W.J. 1986. *Dictionary of Link Words in English Discourse*. New York: Macmillan.
- Biber, D., S.Johanson, G.Leech, S.Conrad and E.Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Blakemore, D. 2002. *Relevance and Linguistic Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Carter, R. & M. McCarthy. 2006. *A Comprehensive Guide to Spoken and Written English Grammar and Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Celce-Murcia, M. & D. Larsen-Freeman. 1999. *The Grammar Book*. Second Edition. Boston, MA: Heinle & Heinle.
- Fraser, B. 1990. 'An approach to discourse markers.' *Journal of Pragmatics* 14, 383-395.
- 1996. 'Pragmatic markers.' *Pragmatics* 6(2), 167-190.
- 1999. 'What are discourse markers?' *Journal of Pragmatics* 31, 931-952.
- 2006. 'Towards A Theory of Discourse Markers.' In K.Fischer (ed.), *Approaches to Discourse Particles. Studies in Pragmatics Series 1*. Amsterdam/Tokyo: Elsevier Press. 189-204.
- Frodesen, J. & J. Eyring. 1997. *Grammar Dimensions*. Book 4 (2nd ed.). Boston, MA: Heinle & Heinle.
- Halliday, M.A.K. and R.Hasan. 1976. *Cohesion in English*. London: Longman.
- Halliday, M.A.K., A. McIntosh & P. Strevens. 1964. *The Linguistic Sciences and Language Teaching*. London: Longmans.
- 廣瀬浩三. 1988. 「英語の談話修正表現について」六甲英語学会（編）『現代の言語研究』263-74. 東京：金星堂.
- 1989a. 「談話辞 anyway の分析」『語法研究と英語教育』11, 29-38. 東京：山口書店.
- 1989b. “A Discourse Grammar of anyway.” 『島根大学法文学部紀要文学科編』11(2), 1-20.
- 1997. 「Love means never having to say “What do you mean?”—メタ言語活動の諸相(1)」『島大言語文化』4, 14-61.
- 1998. 「メタ言語的観点から見た英語表現について」小西友七先生傘寿記念論文集編集委員会（編）『現代英語の語法と文法』東京：大修館書店. 287-95.
- 1999. 「Love means never having to say “What do you mean?”—英語におけるメタ言語的活動の諸相(2)」『島大言語文化』7, 1-51.

- 一. 2000. 「語法研究の立場から見た談話標識」『英語語法文法研究』 7, 35-50. 25
 - 一. 2001. 「談話の展開を促す談話標識」『英語青年』 Vol. CXLVII, No.7, 446-47. 東京：研究社.
 - 一. 2003. 「関連性理論から見た談話標識」『島大言語文化』 14, 21-41.
 - 一. 2012. 「談話標識を巡って」『島根大学外国語教育センタージャーナル』 第7号, 1-37.
 - 一. 2014. 「談話標識を再考する」『島根大学外国語教育センタージャーナル』 第9号, 1-33.
 - 一. 2015. 「Well の感覚」『島根大学外国語教育センタージャーナル』 第10号, 1-26.
 - 一. 2017. 「談話標識のシノニムの記述を巡って」『島根大学外国語教育センタージャーナル』 第12号, 1-12.
- Larsen-Freeman, D. & M. Celce-Murcia. 2016. *The Grammar Book*. Third Edition. Boston, MA: Heinle & Heinle.
- 松尾文子・廣瀬浩三・西川真由美編著. 2015. 『英語談話標識用法辞典』—43の基本的ディスコースマーカー—. 東京：研究社.
- 松尾文子・廣瀬浩三. 2014. 「英語談話標識の諸相 (1)—英語談話標識研究の変遷」『梅光言語文化研究』 第5号, 1-38.
- 松尾文子・廣瀬浩三. 2015. 「英語談話標識の諸相 (2)—談話標識についての基本的考え方と分析の観点」『梅光言語文化研究』 第6号5, 1-51.
- Parrott, M. 2010. *Grammar for English Language Teachers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Schourup, L. 2001. 'Rethinking well.' *Journal of Pragmatics* 33(7), 1025-1060.
- Schourup, L.C. and T. Waida. 1988. *English connectives*. 東京：くろしお出版.
- Sinclair, J. (ed). 1990. *Collins COBUILD English Grammar*. London: Williams Collins Sons & Co Ltd.
- Swan, M. 2005. *Practical English Usage*. Third Edition. London: Oxford University Press.
- Swan, M. 2015. *Practical English Usage*. Fourth Edition. London: Oxford University Press.